慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	セシリー・マクワース「若きマラルメ」（５）（翻訳）
Sub Title	«The young Mallarmé» de Cecily Mackworth (5) : traduction
Author	Mackworth, Cecily(Harayama, Shigenobu) 原山, 重信
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.46 (2008.) ,p.129- 142
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	森英樹教授・西尾修教授・高山晶教授退職記念論文集 = Mélanges offerts à Mori Hideki, à Nishio Osamu, et à Takayama Aki
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20080331-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

セシリー・マクワース「若きマラルメ」(5)(翻訳)

原　山　重　信

『アシニーアム』

「私たちの小説家と現代の詩人たちの幾人かのために読者を創ること！私たちは何とかそれがうまくできそうです[a)]」と1875年11月、マラルメはエミール・ゾラに向けて書いた。かねてより彼は、フランスとイギリスの文芸という未だ大きく隔たっていた二つの世界の連絡係のようなものを務めるかもしれないと感じていた。その考えは彼がジャーナリストとして初めてロンドンを訪れている間に[1)]カチュール・マンデスと共に検討され、恐らくジョン・ペインとの長い話し合いの間に実現したのだった。ペインはパリに彼を訪ね、マリー・マラルメからヤマウズラのキャベツ添えの調理法を学び、ロンドンに紹介すべき作品をどっさり抱えて帰国した。その計画は1875年の初めに具体化した。それはリチャード・ヘンギスト・ホーン[b)]がシュヴァリエ・ド・シャトランからの紹介でローマ街の新しいアパートに彼を訪ねてやってきた時だった。

ホーンはジョン・ペインや若いイギリス詩人たちの大多数の友人だった。しかし年齢はシャトランに近く、ブラウニング夫人になる前のエリザベス・バレットと長い精神的(プラトニック)な文学交際を続けてさえいた。彼は年甲斐もない子供っぽい戯れで時々若い友人たちを困惑させ、彼のことをこっそりと「ホーン親父さん[c)]」と呼んでいたマラルメは、「私たちの誰よりも若いあなた」〔1875年3月10日付リチャード・ヘンギスト・ホーン宛書簡〕と書く時、それが彼にどれほどの喜びをもたらすかを知っていた。

ホーンは、多くの凡庸な詩と僅かの小説のほかに、ハムレットの批評研究

の勧めをもってマラルメのところにやってきた。彼はしばらくローマ街に滞在し、フランス語、英語混じりで繰り広げられた長い会話の間に、フランス名詩選を出して、高踏派の作品を英国民に紹介するよう提案した。それは決して具体化されることはなかったが、これらの議論からもう一つの案が形をなした。

> その間に（とマラルメはホーンがイギリスに帰国後書いた）、私たち両国の文学を共にもっと一層緊密に結びつけるのに役立つような、以下に申し上げる案を取り上げることを私たちはできないでしょうか。どこかの雑誌の好みに応じてロンドンでまとめるべき、こちらの文学の動向に関する毎週パリからの定期便（一通の手紙かメモ書き）に相応しい場所はないでしょうか。そしてそれは採算が合うでしょうか。私は、今起こりつつある面白いこと、或いは単に好奇心をそそるようなことを知る環境におり、現代の作品、作家に関する発見や批評をどれだけでもお送りすることができます。そしてそれらを素材にして、フランスの美術、文芸の、とても魅力的で正確な時評を作っていただくことができるでしょう〔同上書簡〕。

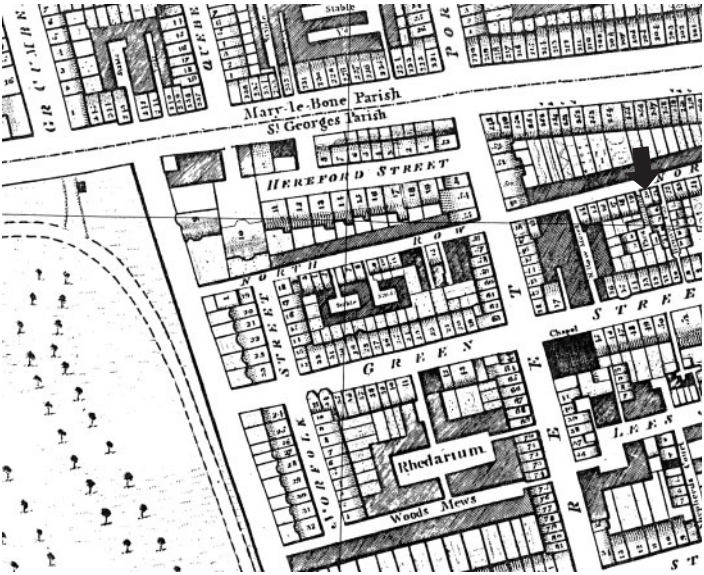
その考えが根を下ろしたことにより、『アシニーアム』誌へ定期的に寄稿するようになった。寄稿は 1875 年に始まり、マラルメがゾラに表明した希望を充分にかなえるものであった。『アシニーアム』誌は、近年幾らか変容を遂げ、殊のほか国際的視野をもった活気溢れる定期刊行物になっていた。到底ありそうもないような場所からの断片的なニュースが読者に告げるのは、「2 人の日本人哲学者が最優秀博士号を授与された[d)]」とか、「シャム語には、ヨーロッパの学者にとって興味の対象となるような、今なお出版されている作品は 2 つしかなくて、それはすなわち、1 冊の文法書と 1 冊の辞書だけだ。シャム王自身が小百科の刊行を命令してきたのだということを知ったらなおさら申し分ない[e)]」というようなことだった。またさらにこの週刊誌は「マジャール語の定期刊行物」の問題にまで踏み入った。それは、パ

リで起こっていること全てに多くの注意を払っており、エドモン・アブー[f]がたびたびその都市〔パリ〕からの通信を寄稿し、文学上、芸術上の主たる出来事を記録に残していた。マラルメは、同じ主題の、もっと軽いけれども、時にはもっと好奇心をそそる興味深い側面を扱う通信を提案していた。この「通信」は結局、「ゴシップ(閑話)」と題され、無署名の短いメモの形をとり、彼自身の友人たちや関心事を探る手掛かりを我々に与えてくれる。メモはゾラ、マネ(『アシニーアム』誌の方針を定めるのに幾らか影響力があり、印象派の絵画には我慢ならないヘンリー[g]との絶えざる争いのたね)、アルベール・コリニー[ママ][h]の新しい雑誌、カチュール・マンデス[i]、「アルルとアヴィニョンからのプロヴァンスの幾つかの目新しい出来事[j]」などを論じた。マラルメは、これらの「ゴシップ」の中に差し挟むものとして、自分自身のちょっとした宣伝を配置することも怠らなかった。我々は11月20日に「その御蔭をもって、ステファヌ・マラルメ氏による序文付きの『ヴァテック』のフランス語版がまもなく上梓されるかもしれない、著名な愛書家にしてパリの国立図書館の司書であるアドルフ・ラビット氏」を読み知るのだから。

マラルメが『アシニーアム』誌の寄稿者となったのは、アーサー・オショーネシー[k]を通じてだった。この興味深い若者は、リットン卿[l]の私生児だと言われており、当時の文学界に多大な影響力を持っていた。彼はかつてブラウニングの友人であって、ジョン・ペインの親しい仲間であり、ロセッティやウィリアム・モリス[m]、その他多くのラファエル前派の人びとと会った。小柄で身だしなみがよく、活発ですばしこい人で、優れた批評家でありフランス文学通であって、やや締まりのない詩を、イギリスの人びとには〈象徴主義〉だとすぐに見極められるようになるはずの曖昧な文体でたくさん書いた。彼はマラルメの「ゴシップ」の翻訳を承諾しており、マラルメが最も会いたがっていた男の一人だった。もう一人はジョン・イングラムで、ポーの一流の英国批評家であり、のちに最も親密な友人の一人になった人物である。ボナパルト=ワイズの友人であるエドマンド・ゴス[n]、そしてとりわけ、曰く言い難いスウィンバーンもいた。彼はマネによる挿絵付きの、

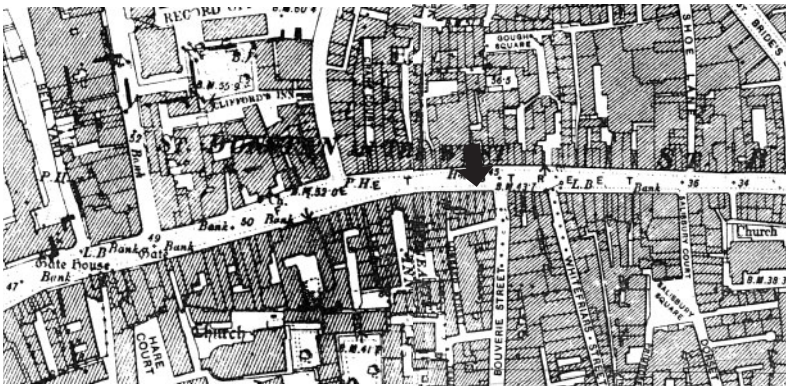
「大鴉」のマラルメ訳を収めた豪華本を1部受け取っていて、「最も偉大なアメリカ詩人が、二人の偉大な芸術家の協力のお蔭で、二度完璧に翻訳されているこれらの驚くべきページの数々[2)]」に対する称賛を表明していた。これらのフランス並びにフランス詩の愛好家たちは皆、マラルメが考えるには、彼が計画していた評論誌に是非とも寄稿してもらう手筈になっていた。それは『文芸共和国』と題されることになっており、カチュール・マンデスが編集長に就任し、マラルメ自身も、その作品をこの新しい刊行物[3)]の目玉にしようというイギリスの作家たちとの仲介者になる予定であった。それと同時に、彼は幾つかのイギリス評論誌と接し、もしかしたら役に立ってくれるかもしれない幾人かの出版者と出会うことを望んでいた[4)]。

彼は希望と構想をいっぱい携えて、8月14日、ロンドンに着いた。今度は、ハイド・パーク、ノース・ロウ20番地のジョン・ペインの住まいに滞在した。それは短期の訪問であり、以前の準備不足の急なロンドン訪問がそうだったのと同様、苛立たしいものに終わってしまった。恐らく彼はイギリスの文学生活がパリのそれに対応するものと同種の高い質をもっていないこと、或るカフェかレストランにたまたま立ち寄って、他の連中がどこへ行ったら見つかるのか教えてくれるような詩人が幾人か確実に見つかるようなことはあり得ないということが、すっかりわかっていたわけでは決してなかった。ロンドンにはこの種の待ち合わせ場所は殆どなかった。カフェ・ロイヤルはまだイギリスの知識人には流行ってきてはいなかったし、パブはまだ全く労働者階級の施設であった。フリート街のチェシア・チーズは、文学的名声を誇り、恐らくパリのプロコープに最も近いものだったが、そこに足繁く通う小さな同人グループ以外には殆ど知られていなかった。人びとは文人たちが集まる個人の家への紹介を求め、そこでさえも事は変わりつつあって、古いサークルは解散していた。8月が都合のいい月でもなかった。「ロンドンにはちょうど今、誰もいません」と、彼はまもなく悲しげにレオン・クラデルに向けて書くことになった。「あらゆる種類の異なる場所から来る何十通もの手紙からは、後悔のほかは何も表わされることはありません」〔1875年8月28日付書簡〕。



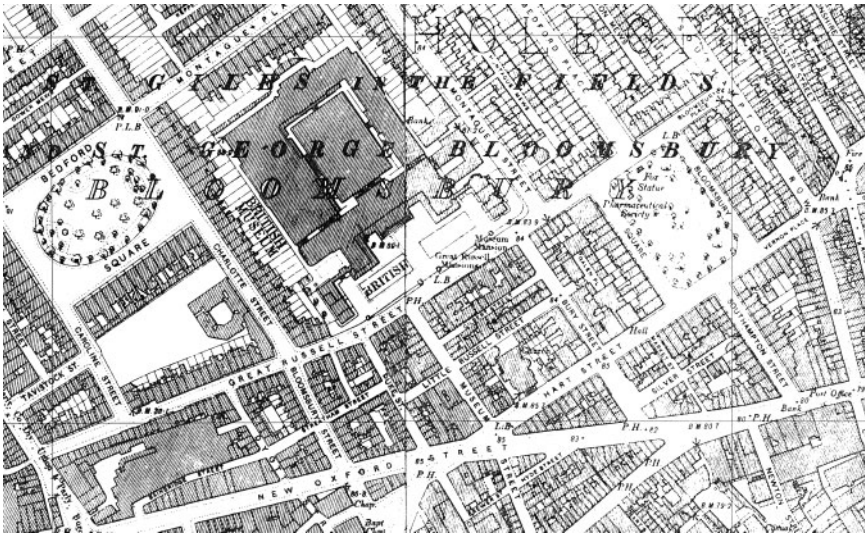
ノース・ロウ 20 番地

出典：『2500 分の 1　ロンドン検索大地図 1792–1897』柏書房、1993 年。



フリート街

出典：『2500 分の 1　ロンドン検索大地図 1792–1897』柏書房、1993 年。



ブルームズベリー

出典：『2500 分の 1　ロンドン検索大地図 1792–1897』柏書房、1993 年。

彼はスウィンバーンの親友として知られるゴスを大いに当てにしていた。マラルメは到着直後、ゴスに自らの最良の英語で書いていたのだ。

> 拝啓、私は数日間ロンドンにいて、友人のボナパルト＝ワイズが貴兄のご厚意に委ねた「大鴉」の冊子をスウィンバーン氏に送り届けて下さったことに感謝を表明したいと存じます。私が見たい本が何冊かある大英博物館に行って数時間仕事をすることは、私がロンドンに参った時の目的の一つでした。恐らくここに入ることを許されるために私がとるべき方策について、当館にお勤めの貴兄から、幾つかご指示がいただけるでしょうか。
>
> これら両方の理由で、ロンドンのどこで、いつ貴兄とお会いできるのか教えていただけますかどうかお尋ね申し上げます［1875 年 8 月日付不詳の書簡］。

ゴスはコーンウォールに行って留守で[5]、オショーネシーは休暇中[6]、イングラムはパリに居り、スウィンバーンは債権者たちの目から逃れていた。マラルメはスウィンバーンが本当に会えないとは信じ難く、ペインは彼の些か痛ましい像を描いている。それは、エレファント・フォリオを腕に抱えてブルームズベリーの辺りを小走りに歩くのがしばしば目撃された「小柄で、鮮やかな褐色のパリ・タイプの姿」だった。腕に抱えるものの中味はマネによる挿絵付きのポー「大鴉」の彼自身による翻訳である[7]。ゴスによれば、彼は自分の時間の多くをこうして「純然たる直観に従ってスウィンバーン氏を見つけようとすること」に費やしたのだった。

幸いなことに、大英博物館が残っていた。多くの文人たち――そのうち幾人かは著名だった――がさまざまな時代に〈読書室〉で仕事をしてきたが、1860年代末と1870年代初頭には、エドマンド・ゴスが回顧しているように、そこはまさに「鳴鳥の巣」だった。ゴス自身も、コヴェントリー・パトモア[0]がそうしたように、暫くの間そこで働いた。オショーネシーは1863年まで読書室にいて、それから動物学の部門へと移動し、そこでは当初、悪名高い注意散漫によって大混乱を招いたのだった[8]。ベルギー生まれの常軌を逸した若き詩人、テオ・マーズィアルズもおり、その補助管理員がリチャード・ガーネットで、彼は、新しい円形読書室が造られて、古い狭苦しい配置に取って代わった当時、アントニー・パニッツィの主任助手だった。彼はシェリーの熱烈な信奉者で、その詩人の未発表の作品を数多く発見し、そのテーマに関する幾つかの興味深い研究を書いていた。

マラルメはそこで歓迎された。ゴスが彼にテオ・マーズィアルズへの紹介状を送ってくれたからである。「テオ自身、貴国の現代〈高踏派〉の強力な支持者」であるから、「貴兄が必要とする手助けは全て得られるよう取り計らってくれる[9]」だろう、とのことだった。同時に、オショーネシーもリチャード・ガーネットに紹介状を送ってくれたので、マラルメは調査のために必要なあらゆる便宜を与えられた。彼は今度こそ、遂に、10年ほど前にボナパルト＝ワイズと初め議論した『ヴァテック』の版をもう少しで完成させるところまで来ており、恐らくサイラス・レディングの『ウィリアム・ベッ

クフォード回顧録』を調べたかったのだ。この書はかなりの稀覯本で、フランスでは手に入らず、当時このテーマを扱った唯一の作品だった。

実に奇妙なことに、マラルメは閲覧券を取り出した形跡はない。しかしながら当時は今ほど正規の手続きは要求されず、ガーネットが恐らく彼を自分の執務室に招いて、それ以上骨折りをすることなく、求められた各書を見せてくれたのであろう。マラルメはこうして自身の序文を完成させることができ、9月4日にオショーネシーは、『ヴァテック』が10月に出版される[10)]旨を伝える「ゴシップ」を『アシニーアム』に掲載することができた。

それから読書室は、例年の清掃と職員休暇のために閉室となり、マラルメをロンドンに留めておくものはなくなった。それはがっかりの訪問ではあったが、それが当時思われたに違いないほどは収穫のないものでもなかったとも大体言える。彼が再びイギリスに戻って来るのはほぼ20年先のことになるのだが、ロンドンの友人たちとはずっと文通を続けていた。彼らはパリに会いにやって来て、ローマ街の質素な狭いアパートの魅力を発見した。そこでは、A.フォンテーナス[p)]が振り返るように[11)]、

> 我々が話しを聴きにマラルメの周りに群がる毎週火曜日の晩には、各自離れている感じがしなかった。自らの運命に失望し、表現されない希望、秘密、そして果たされない野心を抱く、心にかかる月並みな気苦労を抱えたその男は、そうしたものを大切だと感じなくなった。（中略）これらの会合に居合わせる機会をもったことがない者が、全てが言葉の無垢な知性によって、かくも変形され得るなどとどうして想像できようか。

ジョージ・ムーア[q)]、アーサー・シモンズ[r)]、ホイッスラー[s)]、ハヴロック・エリス[t)]、オスカー・ワイルド[u)]、オーブリー・ビアズレー[v)]、その他大勢の人々が有名な火曜の夕べにしばしば訪れ、その詩人の座談の並外れた誘惑の話を持ち帰ったものである。対岸のロンドンでは、『アシニーアム』の短い「ゴシップ」が『ナショナル・オブザーヴァー』紙においてもう少し長めの作品になった。それは編集者さえ理解できないと認めるフランス語の記

事の中に書かれている[12)]。年月が経過するにつれて膨れ上がる全く大勢の友人たちは、半ば貧困に生き、その作品は、自分自身が資格があると感じる唯一の場であると宣言したがる〈絶対〉という不気味な領域[13)]へと彼に同行する覚悟のある、限られた数の同国人によってのみ真価を認められる、その知られざる小柄のフランス人を知っていること、そして彼に知られていることを自慢した。「彼の性格と魅力ゆえに、最も愛すべき者であることを装って」とポール・ヴァレリーは書いた。「彼は、私にとって詩への信仰の完全な純潔の典型を示している。彼に比べれば、他の全ての作家は唯一の神を認めることに失敗し、偶像崇拝に耽ったように私には思えた[14)]」。

訳者後記

本論はCecily Mackworth, *English Interludes*, London and Boston, Routledge & Kegan Paul, 1974 の 第 2 章 The Young Mallarmé の 末 尾 を 飾 る ‘The Athenaeum’ という小見出しのついた箇所の全訳である。『アシニーアム』は、1828 年にイギリスで創刊された書評週刊誌で、少なくともマラルメの書いた記事が英訳され匿名で掲載されていた時期は、年末年始を問わず毎週土曜日に発刊されている。マラルメの記事は、「文学ゴシップ」(Literary Gossip)、「美術ゴシップ」(Fine Art Gossip)、「演劇ゴシップ」(Dramatic Gossip) と題される、時の最新のトピックを紹介する短文の一部に、逐語的にではなくそのエッセンスのみが英訳されて差し挟まれていたにすぎない。したがって、マラルメの散文研究、就中文体研究の題材にはなりにくい。しかし、本文にもあるように、当時マラルメが浴していた文学的、芸術的情報が本人の口から語られるという意味で興味深く、彼の個人的嗜好も垣間見ることができる貴重な資料である。ただ、残念ながらこの記事を本格的に分析した研究は皆無と言ってよいのが現状である。日本語版全集にも抄訳が紹介されるにとどまっている。私としては、いかに些細な資料であろうとも仔細に検討を加えることで、マラルメの理解が深まる何ものかは得られると考えている。そこで、モンドールとオースチンの編集による『マラルメの「ゴシップ」』(Les « gossips » de Mallarmé: « Athenaeum » 1875-1876 /

textes inédits, présentés et annotés par Henri Mondor et Lloyd James Austin, Gallimard, 1962.）という単行本に加えて、プレイアード版新全集、さらに国内でも参照することができる『アシニーアム』の現物マイクロ・フィルムなどを照合し、取り敢えずフランス語原文と英訳をそれぞれ全訳してみる必要性を感じており、早晩その作業に取り掛かる予定である。

この論文は、マラルメの書いた記事の中身にはあまり立ち入っていない。マラルメとイギリス人との交友関係の実態を明らかにしようという趣旨の論文であるせいもあるのだろうが、我々がこれに何かを付け加えることができるとすれば、テクスト分析以外にないだろう。

さらにこの書に欠けているのは、詩人のものした英語の教科書が殆ど取り上げられていないということである。こうした情報を加えることで、70 年代中頃までのマラルメとイギリスとの関係は充実したまとまりを見せることとなろう。「若きマラルメ」の章はここで締めくくられている。この著作にはさらに晩年にオックスフォードとケンブリッジで行われた講演「音楽と文芸」にまつわる諸事情を扱った小論が、ヴェルレーヌの講演と一緒に一つの章にまとめられている。訳者としては、この翻訳シリーズにひとまずまとまりをつけるために、最後にもう 1 回これを取り上げることとしたい。

註（数字は原註、アルファベットは訳註）

1）マラルメは、1872 年 7 月、第 2 回〈国際博覧会〉の取材のために、2 度目の慌ただしいロンドン訪問をした。彼の記事は『イリュストラシオン』紙の 7 月 20 日号に載った。

2）1875 年 7 月 7 日。『アルジャーノン・チャールズ・スウィンバーン書簡集』、E. ゴス、T. ワイズ編、ロンドン、1918 年、p.226.

3）第 1 号は 1875 年 12 月に発行され、その評論誌は僅か 6 箇月しか続かなかった。

4）マラルメは、この文脈ではチャットー＆ウィンダスとペインの出版社、ヘンリー・キングの名を挙げている。

5）ゴスは、『フランスの肖像』（ロンドン、1905 年）の中で、マラルメにロンドンで会ってスウィンバーンに紹介したと述べている。マラルメとスウィンバーンは、実際には数年後パリで出会うまで会うことはなかった。ゴ

スの回顧録は老年期に書かれており、彼の記憶違いだったかもしれない。

6) この訪問からパリへ帰ると、マラルメはオショーネシーが「かくも魅力的な仕方で私に自己紹介して下さった」ことに対して謝意を表明したが、1875 年 12 月 27 日付の手紙によれば、二人は数日前に初対面していた(「遂に知り合いましたね」)ことが分かる。その意味は、オショーネシーは、マラルメが博物館を一度訪問した間に、自身が休暇に出かける前に、手短に自己紹介したということなのかもしれない。

7) ライト、前掲書〔『ジョン・ペインの生涯』、ロンドン、1919〕、p.45.

8) オショーネシーは、数多くの魚の骨の化石をばらした後で、頭、尾、骨と、手の届くところに来るように部分を一緒に合わせ、こうして少なくとも一つの全く新しい種を創ってしまったと言われている。これは今日、恐らく自然史博物館に展示されている。

9)『比較文学評論』、1958 年 6 月 − 9 月号において、マリアナ・ライアンによって引用された未刊行の書簡。

10)『ヴァテック』は実際には翌年の春まで出版されなかった。

11) A. フォンテーナス『我が象徴主義回想』、パリ、1928 年、p.187.

12)『ナショナル・オブザーヴァー』紙は、とりわけ「詩の危機」〔正確には、そのプレオリジナルの「フランスにおける韻文と音楽」〕を 1892 年 3 月に、「魔術」を 1893 年 1 月に掲載した。

13)「演劇に関する覚書」の中の「祝祭」、『ナショナル・オブザーヴァー』紙、1892 年 3 月。

14)『マラルメ雑論叢』、パリ、1950 年、p.9.

a) 原文は 'Create an audience for some of our novelists and contemporary poets! We'll manage to do it' であるが、この著者による英訳の元になるフランス語原文は «Faire un public anglais aux quelques romanciers ou aux poëtes d'aujourd'hui, nous y arriverons»(書簡集、第 2 巻、p.83)(「イギリスの読者を何人かの小説家と今日の詩人たちに創ること、私たちはそれを達成するでしょう」)となっており、若干の異同が見られることを指摘しておきたい。

b) リチャード・ヘンギスト・ホーン(1803-1884)英国の著述家。最初軍人となり、メキシコ独立戦争で活躍、アメリカ大陸を旅行するなど波乱に満ちた生涯を送る。帰国後文学を志し、『コシモ・ディ・メディチ』(1837)、『マーローの死』(1837)などの悲劇を書き、ブラウニング夫人と文通して合作『時代の新しい精神』(1844)を著す。1843 年、名作叙事詩『オリオン』を出版。1852 年、オーストラリアに移住。

c）原語はフランス語で «le petit père Horne» であるが、『書簡集』第 2 巻では «mon gentil petit Monsieur Horne»（「わが善良なるホーンさん」）（p.58）となっている。

d）この記事に関しては、1875 年 11 月 13 日付の第 2507 号、p.648 に ‘Two Japanese students, says the *Allgemeine Zeitung*, have taken the degree of Doctor of Philosophy, *insigni cum laude*.’ という記載があるが、著者による引用とは若干異同がある。

e）この記事は、1875 年 10 月 30 日付の第 2505 号、p.575 に記載されている。

f）エドモン・アブー Edmond About（1828–1885）。フランスのジャーナリスト・小説家・劇作家・歴史家。高等師範学校をテーヌと同期に卒業。ジャーナリズムで名声を得て、ナポレオン 3 世の寵を得たが、1870 年以降共和主義に転じ、『19 世紀』紙を創刊。1884 年にアカデミー入りし、翌年没。著作は『現代ギリシア論』（1854）、小説『山の王』（1857）など多数。尚、彼は毎号ではないが、‘Notes from Paris’ というタイトルのコラムを同誌に持っていた。

g）ウィリアム・アーネスト・ヘンリー William Ernest Henley（1849–1903）。英国の詩人・批評家・編集者。77 年、週刊誌『ロンドン』の編集長に就任以来、終世文壇ジャーナリズムで活躍。スティーブンソン、キップリング、H.G. ウェルズ、イェーツらの新進作家を登用。画家ホイッスラーを弁護し、ロダンをイギリスに紹介したことで知られる。

h）原文は ‘Albert Coligny’ とあるが、著者は ‘Albert Collignon’ 及び ‘Charles Coligny’ 両者の混同から、‘Collignon’ とすべきところを ‘Coligny’ と誤記したものと思われる。だとすれば、その「雑誌」とは『文学生活』（La Vie littéraire）のことである。同誌は『アシニーアム』、1875 年 11 月 13 日付の第 2507 号、p.643 に発刊が告げられているが、1878 年までの短命に終わった。因みに、アルベール・コリニョン（1839–1922）は、『書簡集』第 1 巻 p.98 の註に拠れば、スタンダール論（1869）やディドロ論（1875）を著している。

i）1875 年 11 月 20 日付の第 2508 号、p.675 に載っている。

j）1875 年 12 月 11 日付の第 2511 号、p.675 に見られるが、この引用は字句通りではない。

k）アーサー・オショーネシー Arthur William Edgar O’Shaughnessy（1844–1881）イギリスの詩人。大英博物館の動物部門に勤め、魚類と爬虫類の研究に携わる。詩作の上では、親交のあったロセッティらラファエル前派の影響を受ける。『フランスのレイ』（1872）、『音楽と月光』（1874）、『或る労働者の歌』（1881）などの詩集がある。

l) リットン Edward George Earle Bulwer Lytton(1803–1873)。イギリス小説家・劇作家・政治家。主著『ポンペイの最後の日々』。

m) ウィリアム・モリス William Morris(1834–1896)。イギリスの詩人・美術工芸家・社会主義者。ロンドンの富裕な証券仲買人の家に生まれる。生家がロンドン郊外のエッピング・フォレストに接していたため幼時から自然に親しみ、後年彼が自然を尊重するようになる下地を作った。1853 ~ 56 年、オックスフォード大学のエクセター学寮に学んだ。そこで、バーン=ジョーンズと親交。58 年、D. G. ロセッティ、バーン=ジョーンズらラファエル前派の活動に加わる。

n エドマンド・ゴス Edmund William Gosse(1849–1928)。イギリスの批評家。1867 年から勤めた大英博物館館員時代にマラルメと知り合う。はじめ詩人を志し、同時に雑誌・新聞に高踏派から象徴主義に至るフランス文学、北欧の文学の批評紹介の文章を寄稿詩、批評家の地位を確立する。未知数の存在だったジッドを逸早く認めた。エッセー集『卓上の本』(1921)などがある。スウィンバーン、ヘンリー・ジェームズらとも親交があった。

o) コヴェントリー・パトモア Coventry Kersey Dighton Patmore(1823–1896)。イギリスの詩人、ジャーナリスト。16 歳の時フランスの学校へ行かされ、反フランス的になった。1844 年に最初の『詩集』を出版し、概ね好評。翌年父親が経済的に行き詰り、彼は 46 年から大英博物館で助手として働き、約 20 年間勤めた。また結成間もないラファエル前派の人たちとも知り合い、機関誌『ジャーム』に寄稿した。

p) アンドレ・フォンテーナス André Fontainas(1865–1948)。ベルギーのブリュッセル生まれの詩人・批評家。マラルメへの崇拝から詩作を始めた。他に『或る詩人の告白』(1936)など象徴派研究にとって貴重な証言がある。

q) ジョージ・ムーア George Augustus Moore(1852–1933)。アイルランド人の英国小説家。成人してパリに渡り、印象派の影響下に絵画を学んだが、文学に転じ熱心な自然主義信奉者となって 1888 年ロンドンに戻る。1901 年ダブリンに移り、アイルランドの文芸復興運動に肩入れしたが、またロンドンに帰った。小説に『役者の妻』(1885)、『エスタ・ウォーターズ』(1894)、『湖』(1905)などがあり、自伝『出会いと別れ』(1911–1914)がある。

r) アーサー・シモンズ Arthur William Symons(1865–1945)。イギリスの詩人・批評家。ウェールズに生まれたが、両親はコーンウォール出身。『ブラウニング研究序説』(1886)で批評家デビュー。世紀末英文学の前衛雑

誌『サヴォイ』を編集した。フランスの象徴派を紹介した『文学における象徴派運動』（1899）で名高い。

s）ホイッスラー James Abbott McNeill Whistler（1834–1903）。パリとロンドンで活躍したアメリカの画家。パリで修業し、クールベの自然主義の影響を受け、ルグロ、ファンタン＝ラトゥール、マネらとの交友から影響し合う。サロンに落選し、1959 年ロンドンに移ってロイヤル・アカデミーに入選。ロンドンではラファエル前派、とりわけロセッティと親交を結び、日本趣味を共有。70 年ころから独自の画風確立。評論『十時の講演』（1888、私家版は 1885）がある。

t）ハヴロック・エリス Henry Havelock Ellis（1859–1939）。イギリスの性心理学者、精神分析学の草分け的存在。文芸批評でも活躍し、ゾラの紹介に努めた。大著『性心理学』（7 巻、1897-1928）のほか、『サヴォイ』誌に掲載された『ニーチェ論』、『カサノヴァ論』がなどがある。

u）オスカー・ワイルド Oscar Fingal O’Flahertie Wills Wilde（1854–1900）。イギリスの詩人、小説家、劇作家。アイルランドのダブリンで生まれた。先祖はオランダ人。ダブリンのトリニティ・カレッジとオックスフォード大学のモードリン学寮で学ぶ。ラスキンとペイターの影響の下に唯美主義を唱えた。スポーツを嫌い、青磁器や孔雀の羽毛やラファエル前派の絵画などを収集。『意向集』（1891）では、「言語は思想から生まれるのではなく、言語が思想を生む」などといったような、イギリス近代文学と深く関わる認識を提示。パリで戯曲『サロメ』をフランス語で書く。

v）オーブリー・ビアズレー Aubrey Vincent Beardsley（1872–1898）。イギリスの画家・文筆家。『アーサー王の死』の挿絵でデビュー。以後、雑誌『イエロー・ブック』、『サヴォイ』の美術主幹を務めたほか、ワイルドの『サロメ』（1894）、テオフィル・ゴーティエの『モーパン嬢』、ポープの『髪の掠奪』、ベン・ジョンソンの『ヴォルポーニまたは狐』などの本の挿絵を描く。幼少から病弱で、結核のため早世。はじめバーン＝ジョーンズ風の絵を描いていたが、ホイッスラーや浮世絵の手法を取り入れて、抽象的な要素を含む独自のペン画のスタイルを確立。文筆家としては、綺語・造語を散りばめた文体で、退廃派の傑作を紡ぎ出し、一部世紀末作家の 18 世紀偏愛を反映する。

尚、人名の註に関しては、主として集英社『世界文学事典』の記述を元に、自らまとめた。各種文学事典に載っていないマイナーな人物に関しては『書簡集』の註を参照されたい。